おすすめのＳＦ小説

帯広市医師会
北海道帯広保健所
一色　　学

子どもの頃はよく読んだＳＦ小説。もう何十年も読んでいないが、おもしろい作品があれば読んでみたい。そのような会員に３作品を紹介します。読書習慣のない方でも一気読みしそうな逸品です。

１．『リプレイ』

ケン・グリムウッド著、1987年、新潮文庫。小さなラジオ局でニュース・ディレクターをしているジェフは、43歳の秋に死亡した。気がつくと学生寮にいて、どうやら18歳に逆戻りしたらしい。記憶と知識は元のままで身体は25年前のもの。株も競馬も結果を知っているので大金持ちに。が、再び43歳の同日同時刻に死亡。気がつくと、またリプレイ、そしてまたリプレイ…。人生をもう一度やり直せたらという願望を実現した男の意外な人生。人生は一度きりがいいのかも。

２．『星を継ぐもの』

ジェイムズ・Ｐ・ホーガン著、1977年、創元SF文庫。月面調査員が真紅の宇宙服をまとった死体を発見した。現在よりも数十年は進んだ技術で装備された宇宙服。調査の結果、この死体は死後５万年を経過した地球人。果たして現生人類とのつながりは。やがて木星の衛星ガニメデで、地球のものではない、途方もなく科学技術の進んだ宇宙船の残骸と、船内に多種多様な生物の死体が発見されたが、宇宙船は2500万年前のものであった…。続編が「ガニメデの優しい巨人」「巨人たちの星」「内なる宇宙」と３作ありますが、第１作目だけでも充分満足できる内容です。

３．『火星の人』

アンディ・ウィアー著、2014年、ハヤカワ文庫SF(上下２巻)。有人火星探査３度目のミッションは、猛烈な砂嵐により６日目にして中止。火星を離脱する寸前に事故が起き、マークひとりが火星に残された。不毛の惑星に一人残された彼は、限られた食料・物資、自らの技術・知識を駆使して生き延びていく。映画「オデッセイ」の原作。絶望的な状況にありながらも地球への生還をあきらめず、ひょうひょうと生きぬく主人公の工夫や行動に思わず吹き出し、涙する感動の傑作です。

３作品とも時間、場所、人物相関などのメモを取りながら読み進めると、状況がより理解しやすく、おもしろさが増します。

スーパー愛好家のプライド

江別医師会
たぐち内科クリニック
田口　浩之

スーパー（マーケット）は楽しい。強くはないが酒が好きで、酒の肴を買ったり作ったりするのが好きなので、今夕どういう酒を飲み、どういうものを食べるか起床時から考えることがしばしばある。まず何を飲むか、ビールが最初なのは当たり前、その後はワインか日本酒かウイスキーか。ワインなら白赤、泡のどれにするか。いろいろと考えを巡らす。そのつまみには何を食べるか、どう作るか考えるのが楽しい。何を食べたいのかから始める発想もある。今日は主に肉系か魚系か、豆類や野菜系も捨てがたい。そういえばあの時メモしたレシピで作ってみるか…など考えてしまう。休日の前の仕事帰りのスーパーでの買い物のひとときは正に幸福感そのものだ。しかしここからが難儀だ。普段の経験が問われる。つまり、各々のスーパーによって何が得意分野なのか良く知っておく必要がある。魚系が美味しくて新鮮なスーパーもあれば、肉類に掘り出し物があるスーパーもある。良質な調味料はあるけれどやや高い店。品種によっては質が良くて安い野菜がある店。各々のスーパーの特色を見極めなければいけない。惣菜も見た目で騙されてはいけない。揚げ物は大概衣が厚く、後悔することが多い。

疲れた体に鞭打ってスーパーをはしごすることもある。その結果とてもいい買い物ができた時もあれば、徒労に終わる時もある。男たるもの籠を持ってうろうろする様はあるいは滑稽に見られているかもしれないが、気にする必要などない！と開き直っている。単に胃を満たすためだけにここにきているわけではない！と。

コストパフォーマンスに優れた食材を追い求めている食材研究家なのだと勝手に自負している。安くていいものばかり求めている訳ではない。例えばブラータというチーズを買うのなら近くのスーパーにはなく、少し遠くのスーパーに行くしかない。小さいのに一個500円ほどする高級品だが、ここはプライドにかけて時々買う。一方でシールを貼ってある消費期限が近い値下げ商品を（たまに？）十分考慮して購入し、うまくいったときの満足感も捨てがたい。

スーパーは楽しい。仕事帰りに寄ってみると、たとえ目的の物が買えなくても、少しストレスが解消するような気がする。